

キリスト教、神道に於ける、事物把握(知覚意味づけの様式)の特徴に関する研究

野村, 暢清

<https://doi.org/10.15017/2328777>

出版情報 : 哲學年報. 22, pp.179-224, 1960-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



キリスト教、神道に於ける、

事物把握^(註¹)(知覚意味づけの様式)の特徴に関する研究

野村 暢 清

キリスト教的文化の伝統の中に生きている人々に、普通のありきたりの行動、何の緊張も努力もなしになされる当然の行為と考えられているものが、神道風の文化の伝統の中の人々に、異様なもの、或は英雄的な行為として、或は奇異な行為として捉えられることがある。丁度、この逆の場合も数多く見出される。美しい風景の鑑賞の仕方、世の出来事、死の意味づけ、これにともなう行動なども異ったものを含んでいる。このような異った行動の型の展開されて来る所以の最も重要な要素の一つとして、それぞれの伝統の中の人々の場面把握、意味づけの様式の異り、知覚様式の異りがあげられる。それを、ここで、問題として取りだしてみる。人間は自分が捉えた場面に對して反応し行動する。この行動の出発点となる環境、場面の捉え方に関して実証的な行き方で若干の考察を進めて行こうとするのである。この問題の重要性は最近多くの学者の言及しているところである。^(註²)

私は、ここで、キリスト教と神道について考察して行きたいと思っている。しかし、キリスト教もその長い歴史の

流れの中に種々の姿を展開し、数多くの教会教派をもち、又種々の民族の文化と混合しているものであり、神道も歴史の流れの中に、或は儒教的なものを含み、或は仏教的なものとの混合し、社会階層により知識の様態その他により種々の形のものを展開し来っているものである。今、ここで、両者についてその全部を覆うことは勿論出来ない。ここでは若干の調査を通してという条件づきで仮設を構成してみたいと思うのである。

しかし、このように二つのものを対比的に考察することが学問的にどのような意味を持つかという問題、又文化比較、宗教比較に関して提起される諸問題に関する細かな議論は今では省略する。私自身ある種の宗教思想、宗教集団はそれ自体の中で発展と展開をなす局面を含んでいることを E. Troeltsch, J. Yinger ^(註3) などとともに認めるものであるが、ただ従来行われた、機能的全体としての文化全体から切り離しての宗教現象のみの対比は学問的意味の弱いこと、及び私の approach が機能的な方向よりなされようとしていることをここで述べておく。

更に、この把握様式を捉えて行くに際しても、研究の目的、問題意識の在り方により、これを切る切り方が種々異りうることは勿論であるが、ここでは、キリスト教と神道の対比に焦点づけて、それに適した局面から分析して行く。

ところで、この分析に際し、自然の捉え方、時間的展望、自己の捉え方、価値づけの姿、神の捉え方などはその核的な問題点の一部として考えられる。この論文では最初の三つの局面について、その若干の特徴的な在り方に言及していく。勿論、これらの局面はそれぞれ区分して考えること自体が無理な程相互にからみ合い滲透し合った現象であり、統一的全体として把握を方向づけている現象であるが、研究の便宜上これらを順次考察して行く。

一、自然の捉え方

自然の捉え方に関しても、同じくキリスト教と呼ばれているものの中に、色々異ったニュアンスが存している。イスラエルのそれとギリシャのそれとの異り、ギリシャ文化との接触による *logos* の概念の導入、及びそこでの *pantheistic* な傾向の強まり、又中世に於ける無関心の増大を始めとして、その異文化圏への伝播につれての文化変容を蒙った姿などがそれである。しかし、この異りにも抱らず、新旧約に現れている如き *monotheistic* なキリスト教の根本的在り方によって、又歴史的伝統を通して、規定された共通の傾向の存在を否定することは出来ない。現在の日本のキリスト者は欧米のキリスト者と確かに異りをもってはいるが、それと共通した傾向をもまた充分に含んでいる。そこで、ここでは、研究に際しての便宜という問題が非常に大きく働いているのではあるが、宗教的局面以外の文化の諸局面の在り方を比較的共通にする日本に於けるキリスト者と神道者の対比を中心にし、欧米でのそれを顧慮しつつ、問題を捉えて行く。

日本に於いてキリスト教的な文化的伝統の中での行動様式の型を、或る制限つきではあるが、強く持っているものの一つとして、或る意味でそれに一生をかけている牧師神父群が考えられる。これと対比して神道的なる文化を比較的強く身につけているものとして神職群を考えることも出来よう。そこでこの問題場面での一つの *sample* として牧師群神職群を取りだし、更に *control group* として宗教に関心を持たぬ一般人群を取りだしてみた。これらをそれぞれの *sample* として対比してみるのである。神父群は他の二者と対比的に考察すると牧師群に類似している

ので、ここではデータ^(註5)としてあげることを省略した。

同じ写真への T・A・T 風の反応に於いて牧師群の自然への言及度は一般人群神道者群に比して非常に少い。これは、写真 I への反応でこの人間と背後の島海などの自然との接触到言及したものは神道者群 42%、一般群 21% に対して牧師群 3% であること、写真 Story の中に自然の入って来る度合も同様の姿を示していることなどにも観察される。



又「深い」「静かな」「柔い」というような刺戟語への自由聯想の結果も表 I の如くである。一般群、神職群が井戸、海、山、毛のような自然的な深さ静かさ柔かさに関する反応を多くなすのに対し、牧師群には「深みのある人間」「どのような喧噪の中でも目をつぶると静かな心を持てる自分は幸だ」「自分の生涯の間に会った柔かりし人を数名思いだした」の如き自然のそれでない反応が多くみられる。このような反応は「深い」に関しては 93% に、「静かな」に関しては 64% に、柔かいに関しては 61% に含まれている。この事例は牧師群と神職群一般群の自然の捉え方に相当はつきりした異りが存していることを示している。

更に、神道者神職群の自然への反応の中には他群に見られぬ特殊の姿が見られる。この群の反応にのみ自然を通しての 'inner adjustment'、外部の状態は同一の困難の中にありながらも、自然との接触を通して、内に新しい活力を得て立ち上る姿の反応が見られる。

表 1

「深」

一般群(事例の一部)	神 職 群	牧 師 群
谷底、落ちる、井戸、海、愛情	谷、川、井戸	神の恵みの深さ、海の深さの人間の考えているより深いこと、深処に乗り出して綱を下ろせ
青色、秋の空、近所にある海	川の淵、地図の海の青色の濃淡、哲学、浅い、鐘乳洞	人生の深海に乗り出せと教えられた青年時代はよかった。
海、青い、船、洞爺丸	池に映る樹影が時々揺れる。じっと見ていると心が吸い込まれる程深い。	人生を深く考えたい。西田哲学のすばらしさ、癡病者の信仰の深いこと、津軽半島の岬から見下ろした日本海の深い色
海、青黒い沼、沈鐘	淵、水泳、住みたい、魚、暗い	深味のある人生、表面的な風波に煩わされない原理的な生き方をしなく思う。
秋の空は深い	ある人の知能、神徳、父祖の恩、情け、最後に青々とした海の深いことを思い出した。	海や池の深さを思うが、思想の深さ、学問の深さ、さらに信仰の深さということを考えさせられる。
海、寒い、人生の謎、何のために生きる、 <i>alone</i>	君の恩、親の恩、深いことが忘れ難い、小学校の頃父母の恩は海よりも深くと教えられたるも、今の青年は親の恩などは深いとは思わぬ、実になげかわしい。	井戸、ガンジールの頭、身投げしようとする人「キリストの愛の深さ」という聖句
深い、谷川のよどみ、海の深さ 奥深い山	情け、海、信仰深まる	十字架を通して見た宇宙の本質、神は道徳律ではなくて恵み・愛・赦しであるとの聖書の一節を読んで黙想した時、神の恵み深さを感じ、神の恩恵によって宇宙も人生も包まれているように思った。
海の深いところ、光のさしこまない真暗な海底		

一般群（事例の一部）		神職群		牧師群	
沼、海、恐ろしい、引き入れられそうな感じ		なまけ、人間の知慧、海、神社神道、意味	井戸、真理、神の愛、人生、学問の探求	深いもの程單純のようだ。 The simplicity of the profound	
		浅い、底、谷、穴、井戸	愛の高さ、愛の深さ広さという聖書の言葉が私の心を打って走ります。	浅い、信仰、海、谷、人格の深み、深みのある人間がしたわしいし自分も心がけたい。	
		思い、情愛、理解、信仰、尊敬	神秘さを感じる、ほりの深い顔に氣高さを感ずる。言の意味の深いのに安らかさを感じずる。	井戸をのぞいたとき、深いなあと恐ろしい心地がしました。こわくはあったがしばしばのぞきました。長じて偉大な人格の人や学者におめにかかったとき、その底知れぬ奥深さに畏怖いたしました。	
		深さの神秘、川、海、山	信仰の深さは年とともに増して来るようだが思想はそれと反比例する……広くはなるが深味がない。自分ばかりではなさそうだ……。		
		蒼空の深さ、神の深い思召、子を感じる心の深さ、庭の牡丹			
		恩、母の愛、海			
		濃い、青い、吸込む			

「静かな」

一般群（事例の一部）	神職群	牧師群
静かな山々の朝、深夜	神域、朝の神前行事、茶湯、他人を呼んで神域の静けさに浸らせたい。人間の生活に静かなことが必要だ。静かな所で書の練習をしたい。	あの時を思う―福岡刑務所の独房に把握されていた時、一切を神に委ねる心境。
海、山の静けさ、田園の風景	習字、自宅の床の前、母の裁縫姿、神前、春の海辺、禅、寺院	心の平静、何ものにも動かされざる心境、人をさけたところで神と交わる時を持ちたいと思う。
秋の夜、書齋で本を読んでいる時。	春の日、誰もいない畠でせせせつと働きたい。春の海で蟹と戯れたい。瞑想、大自然の恵み	憧れ、私はその世界を望んでいる。キリストへの正しい信仰に燃えている人と話し合う時にまことの静かさが来る。山頂
谷間、そこに自分を没入させたい、秋の夕暮れ一人田舎道を歩く時。	黄いはみつくした秋の庭、机にはほづえをついて、何となく風景を眺めている。	静かな山の中で、私は時に一日考え祈りたい。激しい闘いにつかれた時、私は静かな所を最も愛する。
近くの山の風景、たんぼの風景	朝、杜頭、悠久	喜び、落着き
故郷の田舎の夜十時以後	騒音、ほのぐらい、小鳥の声、盆栽、掛軸、和歌	神の庭、安息、林、古池、憩い
茶室、山の中、池、風の音	場所、夜、田舎、生活、年老いてより静かな場所を好むようになった。	幼少時代の静かな田舎の静かな環境、静かな家庭、いまの子どもらにあのような時代環境を与えてやりたい。みんな休息を求めているようだ。仏教には静けさがあるが活動がない。キリスト教には活動はあるが静けさがないように思う。
夜、秋、虫の声、春の海	夜、部屋、心、日和、人、人もいつも静かな心を持ちたい。	この離れ座敷のささやかな営み、祈りと勉強、静かに神と交わることの喜びは何ものにも奪われたくない。
寺、蟬の声、水のしたたり、座禪、朝	読書、住居、心、生活	

一般群（事例の一部）		神職群		牧師群	
夜、早朝、寺院		朝、宮、庭、秋、草、光	思い、心境、人生、世界、天地	夜、偉大な力を感じる、静座、内省	月光清き明治神宮の社、参籠の夜明、奈良ホテルの一夜
		境内、林、女性、夜	礼儀、森林、おとなしい	茶の心、山風、月光	
		神における希望、神における平和、贖われしもの、歓喜、苦悩とのたたかひの中における信仰的確信		どんな喧騒の中でも、フッと目を閉じると直ぐ静かな心をもてる自分は幸いである。	
		火災を免れた礼拝堂、朝に夕に一番前列のベンチに独り座して祈る。多くは懺悔が先になる。涙が頬をつたうこともある。静かな祈りの時、何はなくともこの時を持ち得ることは感謝である。もったいない。		西海波静かなる大海原にかもめ飛ぶ、わが心の中静けさはそれにまさりてとこしえの生命に満つる静けさよ。	

「柔かい」

一般群（事例の一部）	神 職 群	牧 師 群
赤子のほった腕	春、ふとん、こたつ、猫の寝姿、愛情、母の顔	子どもの感受性、若芽、雲、春の日光、赤ん坊の手
女性の若々しい肌、つきたてのもち	柔かい手だ	柔かい心、柔かいまなざし、それだけで人の心は柔ぐ。闘志たぎる一面、柔かい心と思いやりを忘れたくない。
女や子どもの肌、春の風、暖かさ、優しさ	羽毛、女体	柔和、円満
女の肌、正月の餅、春風	感じ、食物、若葉	鳩、羊、雛鳥、神の愛、柔かい人がほしい、自分の生涯に出合った柔かりし人を数名思い出した。
餅、ふとん	人手、性質	自分の性格とは反対のことだ。しかしかかる人は好きだ。柔和なるものは、地を嗣ぐといわれたこと。
猫の毛	幼児の皮膚、母のひとみ	赤ん坊、女の子、幼稚園、女性、キリストの柔和、妻、柔い力に満ちた人格となりたい。
はだ、芝生、バラの花	毛、小犬、花	柔かい肌、柔かい着物、柔かい心、柔かい調子
綿のふくらんだ布団、つきたての餅・・・	調子、平和、感じ	乳房、雛、小豆色の雲、赤ん坊の手

一般群（事例の一部）		神	職	群	牧	師	群
肌、女		人に接する態度、言葉、純真さ、芽含み			幼児の柔かい手、皮膚、ほほを思う。		
		餅	豆腐、布団、むし菓子	赤子の手、親の心くばり	柔和、白い餅、柔道、かいこの虫		
					羊の毛、乳牛の乳房、子どもの皮膚 幼児か妻の肉体の感じ、祈りの中における神様の感じ、幸福である。 老成した信仰者の眼ざし、教養ある婦人の仕振り、神を信じて逝去した者の顔、赤児の手・顔 骨もなき豆腐の肉の柔かさ、白き清けき柔さは、われの心もかくあれと祈る祈りのきかれは。 子どもの柔かな体そして柔かいものが私の腕にかかる重さは限りなく豊かな暖かな感じで活にのぞまれます。 美人画、強さを包んだ力を見る。調子の柔かい言葉でじゅんじゅんと誠められた時、悔しい思い出。平和を樹てるためには柔和な心が必要だ。		

「大海に身を投げんとしたが、折しも雲間をもれた月の光にえがき出された金波銀波の美しい海原を眺めた青年は『ああ美しいなあ、大自然は』そして大きなあ！大自然にくらべれば人間など大海の一粟にすぎない。小さな人間が小さな考えで身を投げるといかにも恥しい。美しい自然を汚すことにもなる。生きよう生きようと、再び深い思いにふけりながら時の移るのも忘れたかのようであった。それから数時間……相変わらず前方には金波銀波の海が見え、四辺には青白い月光が満ちていた。美しい月夜の海に見惚れた青年は再び現世に生の執着を感じた。……青年は心身ともに新しい温味に包まれて……」（写真Ⅰへの神職群の反応例）

「悩みから逃避して海への行樂に出る。果てしない海、平和な海も、彼の悩みを慰めてはくれなかった。」（写真Ⅰへの一般群の反応の事例）

ここに、神職群の他群と異った特殊の自然との接触の姿がみられたが、更に、自然の中の生活と人生の幸福のからみ合いの姿を描く反応もこの群にのみ多い。自由聯想への反応などでも自然にひたる態度が強く現れている。岸本博士は日本文化の特徴的傾向として、自己を自然の中に含めてこれを鑑賞する態度、自然の中に自らおりたて、ひたっている自分を含めて鑑賞する態度をあげているが、私はこれを自然にひたるという言葉で表現しておきたい。

「大樹が茂っている。奥床しい。寂として音がない。前途にかすかな明るさが見える。行ってみたいような気がする。ここに住んでいる人はどんな人がいるだろうか。平和と幸福とがあるようだ。……健康で純朴で、人生のすやかな幸福の毎日を送っている」「美しい森、明るい光、……こうした自然の中に自分を見出すものは幸福である」「自然の美と人生の幸福が調和するところに真の尊さを見出すのである」「朝だ、世の中はこんなにきれい、この美しい天地の中に人は生きている」（神職群の写真Ⅵへの反応の事例）

「昼なお暗いようにみえる森の中、ピクニックにやって来た一対の男女が……」「裕福な家の庭園、朝の間は子どもが愛犬をつきリスト教、神道に於ける、事物把握（知覚意味づけの様式）の特徴に関する研究

れて庭を走り廻っていたが、今は太陽の最もきびしい午後二時頃人影なく静かな時」（一般群の写真Ⅷへの反応の事例）

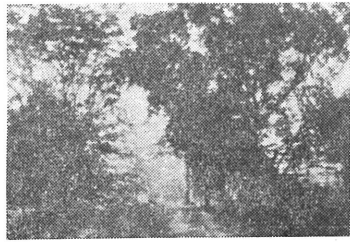
「静かな池の面にうつる静かな森。私が限りなく懐しむ静謐の境……。この写真を眺めつつ私はこんな所で鳥と語り蝶とたわむれ、木霊と話してこの老境の静かな信仰を送りたい。しかし、今世界と日本とは一日の安穩陰遁を許さない。街頭に不良少年はあふれ、男女貞操は乱れ、無神論者は満ちあふれて、人心に安きがない。私は年老いながらいよいよこの現実の人の世に突入しなければならぬ……」（牧師群写真Ⅷへの反応の事例）

この同じ写真への反応例の中にも三群の自然への態度の異りが単的に観察される。神道者と自然の強い関係の在り方、キリスト者に於ける自然の相対的な意味での弱화가観察される。

更に、キリスト者牧師群の自然への態度の他群との異りをはっきり示す一つの事例として、この写真Ⅷへの反応で不安感孤独感などが描かれていることがあげられる。これは牧師群にのみ見られる所であった。（牧師群の示している neurotic な傾向とも関係すると思われるが）

「昼なお暗い森を通らねばならなかった。彼の足音は落葉をかきたてて大きな音がこえました。恐ろしさをまぎらすために大きな声で歌を唱てみたりした。それでも不安は一層つのった。声止みし時の静けさは死を思わしめた。遂に彼は走りだした……」 「追い剥ぎでも出そうで一人歩きは危い。例の繁みのある道にかかるといよいよ寂しさを増す。覆面の人影は得物を持って金を出せと型通りの文句だ……」 「助けて……助けを求める女の悲鳴に……」（牧師群の写真Ⅷへの反応の一例）

以上の諸事実を通して、キリスト者の sample としての牧師群の事物把握（知覚）に、自然が弱い重さを持ち、神道

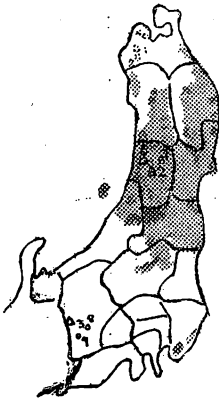


写真Ⅷ

者の sample としての神職の場合にこれが非常に大きな位置を占めていること、そしてこれが frustration situation で大きな機能的な意味をもつ一つの factor であること、又自然の中の生活と幸福のからみ合いが T・A・T 反応にも比較的強く現れるような強度を持っていることが取り出される。

ここで、次に、神道に於ける自然の捉え方に関して更に考察を進めて行く。神道は神社神道、国体神道、理論神道、民俗神道に区分されたりもする。今まで、神職群の在り方を問題として来たので、次に民衆の神道、民俗神道について考えていってみたい。ここでは一例として、山への信仰を取り出して考察を進めて行ってみよう。岩木山、出羽三山、木曾御嶽への信仰を事例として取扱って行く。それぞれについて、数ヶ村の予備調査を経て、岩木山については東目屋村、蓬田村、出羽三山については大和村、舟形村、御嶽については開田村、田立村を調査した。各村約百名の sample について各人約一時間の各個面接テストを行った。これらの地域では相当広範囲に自然の一部である山をめぐる信仰が展開している。三山信仰の分布を一例として表 2 に示しておく。次に、この自然をめぐる信仰の姿を具体的にみて行く。

表 2



- | | | |
|------|---------|-------|
| 1. 岩 | 木 | 山 |
| 2. 出 | 羽 | 三 |
| | (月山・羽山) | (湯殿山) |
| 3. 木 | 曾 | 御 |
| 4. 蓬 | 田 | 村 |
| 5. 東 | 目 | 屋 |
| 6. 大 | 和 | 村 |
| 7. 舟 | 形 | 村 |
| 8. 開 | 田 | 村 |
| 9. 田 | 立 | 村 |
- 黒は三山信仰の
大体の分布圏を
示す。

「田に出て月山の方見て拝むことがあります。」「天気の良い日は氣持がよいので拝む。又悩みがある時拝む。」「お山まいりしてそこに祭つてある神を拝む。」

右の事例にもみられるように、大和村では男子の sample の 56%、女子の 63%、舟形村では男子の 52%、女子の 46%、東目屋では男子の 85%、女子の 87%、蓬田村では男子の 52%、女子の 43%がお山を拝むという行動をなすようである。これらの村の各部落（自然村）では部落或は講として、これらの山々の登拝が行われている。登るに際して数日の精進がなされ、男子のみで集団で登拝されている。ここでは、敘述を簡単にする為にお山かけの際の問題を大和村の場合を一例として少し詳細に言及する。

この村では、毎年の登拝者は、部落員或は講員全体集つての神前で籤で決まる。登拝する人は、個人としてなく、全員の代表として集団と神の前で決定される。そしてこのお山かけ（登拝）の前には精進がなされる。

現在では、部落により家により幾分異なるが、一週間から二日間程家で精進し、登拝の前日より代参の全員が行屋（お山かけの為に精進を行う建物）或はこれに代るものとしての神社にこもる。現在、精進とは水ごりを取り、女をさけ、生ものを食はず、殺生をしない事である。そこでの食事は女手を加えない別火によるものである。この行屋にこもる際の感じとしては、

「身のひきしまる感じ」「敬虔な感じ」「清らかな氣持」「神様の守ってくれる感じ」

の如きが報告されている。登拝は白衣を着し午前二時頃に出発するが、その間の意識は、

「普通の旅行とは正反対の感じ」「必ずお山かけて自分の願いを心から祈つて来ようと思つている」「氣持がひきしまつて来

表 3

	大 和 村		東 目 屋 村		蓬 田 村		舟 形 村	
	男	女	男	女	男	女	男	女
神の存在を肯定するものの% (+1はごく弱度のもの)	+2 64 +1 23	76 12	46 30	63 13	55 18	77 6	44 12	86 7
その中左50代右20代における 在り方	+2 100 +1 50	38 100 50 13	67 22 14 57	66 44	60 29 20 43	80 89	100 17 100 89	
拜むという行動をなすものの %	+2 100 +1	100	60 8	93 3	75 4	93	83 14	100
その中左50代右20代における 在り方	+2 100 +1	100 100 100	78 37 11 13	100 78 11	100 50 13	100 80	100 75 100 100	
山を拜むという行動をなすもの の%	56	63	85	87	52	43	52	46
その中左50代右20代における 在り方	86 18	60 71	100 63	100 63	67 25	25 50	75 13	80 29

る」「神様のところへ近づくような気持」

の如くである。更に高く登って山の上での感じとしては、

「山が深くなるにつれて、一層心をあらためる。神の山に対して恐れをいだく」「身がひきしまる」「有難くて神々しい」「一切の邪念がなくなる」「神様になったような気がする」「何ともいえないような自然の恵みに対する感謝とでもいいような気持になる」「神棚の前よりもずっと壮嚴な有難さを感じる」

の如きが報告されている。山への宗教的態度は登るにしたがって強まっている。登拝の際、お山を下から眺めて神社や神棚の前と同様な感じを感じるものは大和村男子では全体平均で41%、50才代―30才代で63%、20代では殆んどない。登りつつある時、全体平均で58%、50代―30代68%、20代も増加し、山頂では全体平均96%、20代も殆んどがそのような意識を強く感じている。

この登拝の間、部落の人々、特に代参の家族の人々は緊張を意識し精進を行っている。帰って来た時の当人の意識として、

「おかげで無事お参りが出来て有難い」「家内もほっとした感じ、無事お山かけしたことに対する喜び」「参拝には誰でも行くべきである」

の如きが述べられている。大和村男子ではその73%が「講の代参で行く時は豊作の祈願、一人でいく時は自分の家の繁栄」の如く強い願いを持って登拝するようである。ここに、三つの山に關しての登拝の回数、年令、同行者数などに関する表を附記する。

表4 登 回 数 (若干の事例)

[illegible]

各人が登拜した年齢
(数字は数年、～は以前或いは以後を示す)

年齢	50代より	一漸次降りー	20代まで
岩木山	3 7 19 20 50,	3 3 4 18 10 21 27, 16	18 28 30 32, 22, 3
東目屋村	3 19 20 46, 50,	3 12 18 10 12, 31, 16	3 3 16 22 19, 3

年令	50代より	一 漸 次 降 り	20代まで
男 子	出羽三山 大 和 村	28 18 14 24 24 20 34, 18, 30 40,	35 21 20 38, 23, 25 19, 18, 16 21, 20, 38 18, 22, 18 25, 20, 21 20, 20,
	木曾御嶽 開 田 村	20 14 14, 16 15 25, 20, 18 53,	17 18 17 18 20 15 13 20 13 25 25 14 27 27 13 35, 35, 28,

各人登拜時同行者數(概數)及び指導者

年齢	50代より	一漸次降り	20代まで
岩木山	概数	100, 100, 団体	30 20 50 30 20 40 50 40 30 20 5 40
東目屋村	指導者	長老	年寄り
出羽三山	概数	10 ¹⁰ 20(代参) 20	8(代参) 12 代参 部落2 12 10 12 12 10(代参) 13 13
大和村	指導者	神主	神主 神主 神職 " " " "
木曽御嶽	概数	12 ¹² 40 5 70	5 4 5 3 5 15 3 2 5 5 10 10
開田村	指導者	大ていは先達と行く	先達 先達 先達 先達

お山に対してこのような行動が展開しているが、この人々のお山への感じ方の中には、山への宗教意識のない地域の人々と異り「我々を守ってくれるもの」「感謝」「心の支えになるもの」という要素が強く含まれていることが面接テストの集計結果より取り出される。

表5 お山への感じ方の中に含まれている factor (数字はその factor が含まれているとしたものの%)

factor	A 恐ろしい もの	B 薄気味の 悪いもの	C 壮大なも の	D 清らかな もの	E われわれを 守ってくれる もの	F 感謝の気 持	G 心の支えに なるもの	H 親し み	I 美しいも の
月山 大和村(男子) 50代 30代	15	0	75	65	70	80	40	65	60
月山 大和村(男子) 20代	40	40	60	90	40	60	40	60	80

factor	A	B	C	D	E	F	G	H	I
岩木山 50代	0	0	100	89	78	100	67	78	100
東田屋村 (男子) 40代	0	0	67	67	33	50	17	100	83
30代	20	40	100	83	20	60	20	60	100
20代	0	0	75	50	13	25	13	100	88
東京の場合					0	0	0		

更に、御嶽信仰には神道に色濃く存している Shamanism 的なものが含まれている。お座の問題がそれである。お座とは、中座に御嶽の神が憑き、講員部落員がこれに山の神の神意を聞くものである。お座の立つ時には原則としては四天が四周に座し、先達は中座に相對して座る。（山で突然神の憑く場合もある。）この四天に囲まれた地域に対して村人、講員が座るのである。中座は訓練により神憑りの状態に入るようになるのであるが、周囲の事物が見えなくなり無意識の中に喋れるようになるには相当の日時を要する。この中座が無意識の中に語る言葉は、普通の言葉の場合もあり、一般の人には理解出来ない言葉の場合もある。後者の際には先達が通訳して人々に伝えるのである。free Association などのテスト結果よりすると、お座に対する人々の意識は、開田村では53%が、

「不思議という外はない」「有難いと思う」「有難いと思った。当るものと考えなくては誰もやらないだろう」「病人のある時これが本当の神様だと思った」

右の如き比較的肯定的態度の方向を取っている。年令ののぼるにつれて、その態度は強く50才以上では84%がこの態度を含んでいる。開田村で、お座の立つのは、お日待の時（一月十五日）が最も大がかりである。その時には部落中が集って一年中の種つけ、天気のことなどをうかがう。その他の場合の多くは病氣の際である。

高校生の作文テスト結果に、地球のふくらみ、とされている山に対して、この村々の人々は以上のような宗教的態度と行動と習俗とを展開している。「月山にのぼるのに草履をぬいで登ることもある」などにも見られるように、自然物自体が神体として捉えられる傾向も可成り強い。しかし、普通の場合それは同時に、その後山に神が考えられている。そしてお山を心に想い浮べる時、感謝、心の支えになるの如き態度が構成されるにいたっている

のである。

このような自然の捉え方はキリスト教的なものとは全く相対している。次に、キリスト教的な自然把握の特徴的な局面の考察を進めて行く。

第一の特徴として神を背景とした自然把握が取り出される。自然のみの写真Ⅷを見て神に言及するものは牧師群に非常に多い。これは一般群になく神職群に一ケースに過ぎない。

「静かにゆつくりとこんな木立を散歩したい。美しき讃美の歌を口ずさみ、静かに神に祈るために」「恐らく彼にはこの美しい自然も墓場に異ならず、地獄と大差ない。神なきものをそれは現在既に地獄を生活する。希望は神を除外しては決して生まれて来ない。神を認めたものそれは何処をも五月の花園と化し、楽園と化する」「見える目、聴える耳、魂は持ちたいもの」(写真Ⅷへの牧師群反応の事例)

更に、牧師群ではこの写真Ⅷへの反応で創り主としての神に言及したものが多し。他群に一例もないこと勿論である。

「美しい自然、大樹がうっとうしくなる程繁茂している。これも皆全能の神の御手になるものと思うと神に怖れを感じ感謝せざるを得なくなる」「大森林の美は自然美の一つである。……大洋の美もあり天体の美もある。諸々の天は神の栄光を現わし、大空はその御手の業を示す。自然美を賞するものは必ずや大自然の作者を思う。大自然の造り主はまたわれら人類の造り主ではないか」「『元始に神天地を創造りたまえり』この一節にキリスト信者の宇宙観と人生観の全部があり、宇宙これ大なりといえども、これもと神によりて造られしもの、故に神がこれを変更しまた改造し、またある場合においてはその運行を中止し、またこれを早めるはもろろなり」(写真Ⅷへの牧師群の反応)

ここには、生ける神との人格的な強い近しい接触感情を基礎とした自然の捉え方、創り主としての神を背景とした自然把握の存在が観察される。このような捉え方はキリスト者に特徴的なものである。

第二に、キリスト者の自然空間の捉え方の特徴が取り出される。この群は自然を捉える場合、宇宙的といったような捉え方、自然を大きく一まとめにして神に対するもの、神に創られしものとして捉える捉え方をなす傾向を強く持っている。これは先の事例にも観察される。この捉え方は、特に空間を村というところで非常に強くかざる民俗神道に於ける捉え方に対比される。ここでは神は村の神であり、集団の神である。虫送りなどの實際行事でも禍を村の外に送り出すことがなされる。彼等にとって、村は、心理的な意味での世界である傾向は強い。

第三に、キリスト者の場合、人間をも含めての自然を、被造物として、神と対するもの、神と全く異質的なものとし、しかも、神が価値のすべてであり、被造物は全く無価値であるとする捉え方が強く存している。この R. Otto のいう *Kreatur Gefühl* 又神の全き他者性はキリスト教的信仰の中核でもある。この神の前での無価値の感、自然と神の他者性の意識は、欧州の場合と対比すると日本のキリスト者では弱いことが取りだされるが、これを日本の一般人、神道者と対比する時には、相当の異りが観察されうる。神道の場合、祖先、特殊な人々、自然なども神とされ、他者性の意識のなさが観察されるが、神職の T・A・T 反応にも自然、神、自己の一体感が比較的強く観察される。

「対立感のない神我一体の境地」「今日も絶海の孤島に似た岩上に座して大自然の中に神の息吹きを感じ『大いなるもの』の懐につつまれて……」（写真Ⅰへの神職群の反応例）

Pantheistic な自然の捉え方は紀記をはじめ神道関係の諸文献でも、又実態調査場面でも事例をあげる必要もない

程に多い。

キリスト者の地上の出来事の把握には、被造物に関するものとして、相対的な意味での価値の低さの色合いが觀察され、神との関係の濃さに従っての価値附与の傾向の存在が見られるが、神道者の場合にはこのような姿は見られない。神道に於いて、自然の部分を神体として捉える場合でも、キリスト者の神の場合とは異り、彼等の価値体系の中で、これが最高の価値を持つものとしては捉えられていない。

第四に、キリスト者の自然の捉え方の中には、出来事、自然の動きの中に、最終目的への目的的な進行の存在の意識が觀察される。世界、自然は神の目的が實現される秩序であるという捉え方が強く存している。その日記手記類、又 T・A・T 反応の中にはこの姿を觀察し得る敘述が多い。次の J. wesley の日記の如きは、この方向性の意識を単的に示している。

We went afterwards down, as far as we could go safely, toward the point of the rocks at the Land-End.
It was an awful sight! But how will these melt away, when God ariseth to judgment! The sea between
does indeed "boil like a pot". Wesley Sept. 10, 1748

ここには、風景の鑑賞の態度よりも、目的的進行の意識がより強く把握を支配している姿が觀察される。神道の自然把握にはこのような方向性はみられない。

最後に、上述のキリスト者の特徴について、日本と欧州とを対比すると、異質性の意識について、自然の価値づけについて、又自然の鑑賞的な態度などについて、異りの存することが捉えられる。日本のキリスト者は文化変容を蒙

った現象として、神道に近い方向へのかたよりを示していることが取り出されうる。(日記類の対比などにより取り出される。)

二、時間的 局面

Time perspective 時間的展望の在り方が、事物把握、事態の意味づけ、行動の姿を、如何に大きく変えるかは K. Lewin の Time perspective and Morale, in Resolving Social conflict. などにも明かにみられるところである。

前節より観察して来た三つの群は時間的局面に関しても異った姿を示している。先づ、TAT 結果よりすると、同一の絵の人物場面を捉える場合、牧師群は他群より比較的長い時間的な幅で人物、場面を捉え、物語りを造って行く傾向のあることが取り出される。これは写真Ⅲに対して現れた表6の結果などにも見られる。この老人を捉えるのに、長い時間幅でとらえ、幼少期より言及したものは牧師群のみにみられる。そして反対に、最も短い時間幅現在時点



写真 Ⅲ

のみを中心として物語りを構成したものは牧師群に一番少い。仮りに幼少期より言及したものに数値4を、青年期よりのものに数値3を附与するような仕方
で数的に処理してみると、各群の平均値は一般群1.53 神職群1.61 牧師群2.03
の如くなる。又TAT反応の中で、人間の全生涯を一つの時間的一かたまり
にまとめて捉える傾向の強い表現形式である「人生」という語の使用頻度が、

表 6 写真Ⅲの老人を捉える際に与えられた時間幅

	仮りに与えら れる強度値	一般群	神職群	牧師群
幼少時よりを含む時間幅	4	0%	0%	16%
青年期よりを含む時間幅	3	6%	23%	16%
少し以前よりを含む時間幅	2	41%	15%	22%
殆んど現在点に限られる時間幅	1	52%	61%	45%
群としての平均値		1.53	1.61	2.03

牧師群に極端に多いことも、或る意味で、この傾向を示している。更に、刺戟語「悩み」「悲しみ」などへの反応でも、これらが持続的常時の状態として捉えられる傾向は強く、その時間的把握様式が比較的幅を持っているらしい姿が観察される。これらの結果よりして、牧師群は日常の行動場面に於いても時間的展望の幅が一般群神職群よりも若干長くなっているのではないかと考えられる。

しかし、非常に計画的な事業を行っている事業家なども、比較的長い時間的幅をもって事物把握をなしているかも知れない。ところで、この事業家の場合、その *time perspective* の在り方は生活の全面にわたるものであろうか。勿論 *personality* の一局面でのあり方の他の部分への *generalization* は行はれはするが、観察を進めて行くと、それは生活の一局面でのものである傾向が強い。

キリスト教の場合、Yinger^(註8)なども主張する如く、宗教は人格の最も基底的な場面、究極的な場面での方向決定に関係する問題である。キリスト者の *time perspective* の在り方とその変化は究極的な基盤からの変化であり、人格の全面を支配する形のものである。このような点で両者は異りを示している。

更に、このキリスト者牧師群の把握の時間的側面の姿は、一般人神道者より複雑な在り方を示しているようにも考えられる。

牧師群のTAT反応に於いて、二つの時間枠の共在の姿は、その一つの特徴でもある。その時間枠の一つは吾々一般人と共有する普通の時間枠であり、他は永遠という時間概念との関係を含んだ時間枠である。これは死の場面へのTAT反応の際などに最も明かに現れている。この場合にも種々の形があるが、私のDataに現れた一、二を例としてあげておく。



真 Ⅱ 写

「悲嘆は堪えられない程だ。いまこの老いたる父親は現世の無常を感じると同時に、愛児の死に直面して憐憫の情がほとばしっている。人生のはかなさを今更ながら悟ると共に受児に代って自分が死んだ方がよいとまで考えている。この少年の死に際会して人生の死の問題について、永遠の観念をもって、これが解決を計ることは更に肝要である。人間の靈魂は意識をもって永遠の生活をせねばならぬのである。この少年の靈魂は永遠に生きている。人間の死は永遠の生活の過程で、その階段に過ぎないのだ。しかしながらこの少年は永遠の生命を保持して真の幸福を獲得したであろうか。もしこの少年がキリスト者であり、キリストの贖罪を信じて救われておったならば……永遠の生命が与えられ、永遠の幸福の生涯に入ったであろう……。この少年は神を信じキリストの救いを体験していたのであるうか。これがこの少年の永遠の運命を決するポイントだ。この少年がかかる信仰に生きておったとすれば、この死は徒然ではない。その死は生命への上進で神と偕なる永遠の幸福なる生涯である。しかのみならず、キリスト者はキリストと同じ復活の体に栄化されるのであるから……、この少年の死は決して不幸ではない。復活の日まで静かに眠っているのに過ぎない」「死を示しているようです。これは人の最も恐れかつ忌む敵です。人の死を恐るるは死をもって存在の終わりなりと信ずるがため……、われらもまたキリストの如く復活すべきものなるを信ずるが故に平然とこれと対し、死を見ること恰も帰するが如く……」（牧師群写真Ⅱへの反応の事例）

二つの時間枠の共存、そして後者こそ真実の時間枠であるべきであるとの意識の存在が観察される。次にここで、二つの時間枠の *personality* に於ける在り方について、実証的に取りだされる限りで少し考えてみる。これらの事例でも、先づ普通の時間枠で捉えられ、それにつづいて、他の時間枠、より真実のものとされるものがもたらされている。教理的には、後者のみが主張されるが、実際の人間生活では、前者はより前面にあり、後者はより奥にあって働いているのであるということを、この *Data* は示していると考えられる。この後者の時間枠は、信仰の強弱などの無数の条件により、或は強く前面に押し出され、或は比較的背後に退いて働く。信仰の強まるにつれて、後者の時間枠が機能的に大きな意味を持つてくること、自己の関与の度合の弱い場合、同信者の集合の場合などにこの時間枠が働きやすいことなども取り出されている。しかし、キリスト者たることは、必然的に後者の時間枠の承認と *internalization* を含んでいる。

次に、キリスト者に於いては、この二つの時間枠の共存を通して、生涯という時間が相対的な意味で瞬時的に捉えられる傾向が存している。単に短いだけでなく、質的にも劣等な時間として捉えられる傾向がある。これはキリスト者の地上の出来事全体への相対的な意味での低い価値づけとも関係を持っている。この瞬時性の意識の中に於いて、生涯の生活全体にわたる持続的緊張保持の態度は強められる。これは TAT テスト結果の中にも若干観察されるが、Wesley, Calvin などの生活態度の中では遙かに強い形で捉えられる。

He can still walk to the preaching, and retains his senses and understanding tolerably well. But what a dream will even a life of a hundred years appear to him, the moment he awakes in eternity! March 19,

1768. Wesley Journal.

with regard to my own behaviour,..... 2. to labour after continual seriousness, not willingly indulging myself in any the least levity of behaviour, or in laughter, —no, not for a moment. 3. To speak no word which does not tend to the glory of God; in particular, not to talk of worldly things. 4. To make no pleasure which does not tend to the glory of God..... Wesley Journal Feb' 28, 1738.

次に、キリスト者の時間が未来に於いて、断絶点をもっていることについて考えて行く。

この集団では聖書の持つ価値は大きい。T A T 反応で、写真の一部の目立たぬ所にある書物が聖書として捉えられ物語りの中心にもって来られる度合いの強さなどにも、その強度は観察される。この聖書の中の時間につき種々の再解釈がなされたりしているが、そこに現れたものは現在の吾々の普通のものとは異っており、終末と審判とを含んでいる。終末論的色づけはキリスト教の全歴史を通じて存しているといへる。この時間的展望の在り方は、場面把握を行動様式を非常に強く規制する。特に新約時代のキリスト者の行動決定の最も力強い動因の一つとして終末論的時間把握をあげることに反対し得る学者はない。ところで日本のキリスト教の場合、これが進化論などを含む欧米の諸文化とともに入り来ったこと、それを受け入れた社会階層が圧迫されている下層階層でもなかったこと、(Ghost Dance と depression など)にみられる関係に対する(終末論的思考の弱かった近代神学の影響の強かったこと)などよりして、終末論の見解はカトリックを別としてプロテスタントでは比較的弱い、むしろ、Social Gospel Movement などの影響は強く、その反対の社会改革への傾向などを強く含んでいた。これは刺戟語「貧民窟」への free Asso-

ciation の反応などにも現れている。しかし、内村などはこの終末論的見解を強く主張している者であった。

「世の終末を待つべきである……。主は必ず臨り給う。」「われらは世の進化を信ぜずして神の約束を信ずるのである。而して神の約束は宇宙觀に基づく者であって、必ず事実となって実現するのである。」「今の時代においてキリスト再臨を説くが如きは恥辱なりという者がある。あるいはしからん……。政治家まがいの宗教家にキリストの再臨はもちろん信仰のことはすべてわからない。」

牧師群の TAT 反応の中でも、

「天国に在りて、身体よみがえり永遠の生命を与えられて……」「キリスト者はキリストの復活を信ずるものとして、キリストと同じ復活の体に栄化されるのであるから、かくの如き希望を抱いてその時を期待するのであって……」（牧師群の写真Ⅱへの反応の事例）

の如きが觀察される。日本に於けるキリスト者は終末論的捉え方が比較的弱いとはいえ、それが、キリスト教的思考様式の核的なものとして、キリスト者の時間枠に与えている影響はものがし得ないものであることは、先の事例の TAT story の結末のつけ方などにもみられるところである。これに対し、神道者にはこのような終末論的な捉え方を示す反応は全くない。

次に、キリスト者が未来への願いを中心として目的的人格構造を強く構成する傾向をもっている点、及びその希望の構造に於ける特徴的姿をとりだしてみる。

この姿は写真Ⅵへの反応などにも比較的明かにみられる。

（一般人の写真VIへの反応）

「……会社から帰って窓をあけているところ……」「……仕事につかたので窓をあけて空気を入れている……」「……飛行機を眺めているところ……」

（牧師群の写真VIへの反応の事例）

「暗黒な部屋から光明に輝く大空に向かって飛躍せんと身構えている。暗い過去の生涯より断固として光明を目ざして出発せんとしている。彼はいたずらに恥と失敗の過去にいつまでもこだわっていない。反省と懺悔によってすべてを精算し新しい人生への第一歩を踏み出そうとしている。罪深き自己の上に足をふんまえて唯一絶対なる神に身を委ねて行く」「彼はキッと現実と打ち勝つであろう」「氣違ひのように暴れた。しかしそんなことは全く何の力にもならないで、ますます苦しむだけであった。ようやく彼は自分の力では如何ともなし得ないことを悟り、救いの来るのを待った。来なかった。しかし彼は断念しなかった。決して望みを失わないで熱心にますます祈った。……かくの如き苦に与ることは何か深い神の御心があるのではないかと考えにふける。何日も何日も考え、遂にこれを悟り、寛大な待遇に感謝し救いを確信して過ぐす。かくて彼はある時この世を去った。しかしその魂は天に迎えられた。外なる人は崩れども内なる人は日々に新たなり。」

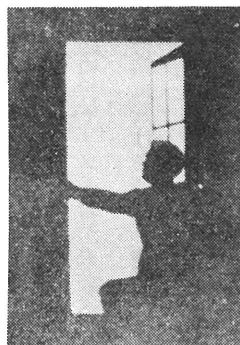


写真 VI

牧師群の反応は一般群のものとは全く異ったものであった。この写真の黒白のコントラストが、希望の構造を引き出すのに非常に適していたと考えられる。希望に向った人格として捉えられる牧師群のそれは、暗さを背景としたもの悩みをふんまえたものである。この群の黒い部分への反応は強かった。「暗やみの中で」「暗い過去の生涯」「罪深き自己の上に」の如く人間の暗さの把握は強い。更に、これは「自虐的忘想に追いこまれ」「神経は益々細くなり、風の音、鼠の走る物音にも飛び上るような……」などをはじめ *neurotic* といつてよいような表現をさえ伴ってい

た。又、free Association 結果でも悩み悲しみへの態度は肯定的なものを含み、持続的存在としての把握を示していた。

「幸いだ。若い時それに徹した時むしろ幸いだ」「悩みをもつは人を美しくするし深くする」「若い時、悩みのないものは半分
の値打ちもない」「私は常に悲しみを持っている」「悩みに到っては絶え間がない」(牧師群の刺戟語悩み悲しみへの free
Association 反応の一例)

この暗さを背景とした希望を有する人格の perception の姿を J. Wach は *Sociology of Religion* に於いて^{註(9)}
optimistic-pessimistic typ として、optimistic typ, pessimistic typ に対している。しかし、この群の希望、
願いの内容は他群のそれと性格を異にしていることは先の私の研究で既に取りだしたところである。それは inner
want として区分される方向の非常に強いものであった。

次に、このような時間的的局面に関する神道者の在り方をみる。神道者では、キリスト者と対比してみると比較的現
在に重点を置いた短い時間的展望が持たれており、古きを尊ぶ傾向は強く過去に高い価値が置かれ、optimistic typ
の perception と呼びうる姿が存している。

「まことの道に志あらん人は、神代の次第をよくよく工夫して、何事もその跡を尋ねて、物の道理を知るべきなり。……世の中
の道理はみな神代の趣きに備われることをもえさくらず……かの唐戎は上古より人心なまさかしくて物事旧きによることを尚ば
ず……。皇国は正直重厚なる風儀にて、何事もただ古き跡によりて、軽々しく私智をもって改むることはせざりし……」「惣じ
て国の治まると乱るるとは、下の上を敬い畏ると、然らざるとにあることにて、……下たる者も、またつぎつぎにその上たる人
を厚く敬い畏れて……」(王くしげ 宣長)

表7 opposite common traits VI 自主性—従属性群平均値比較表
(民度+3より-3一般人群の平均値は0となるように数値化する)

牧 師 群	神 職 群	禪 僧 群	日 蓮 僧 群	神 父 群
-0.17	-1.37	-0.38	-0.53	-0.50

キリスト教、神道に於ける、事物把 (知覚意味づけの様式) の特徴に関する研究

一一〇

このような傾向は復古神道のみでなく、諸神道学説にも、民俗神道にも明かにみられる。神道者神職群の従属性—*religious*の如き非常な強さも、これと関係していると考えられるのである。更に、その時間的展望の中で一年という時のくぎりが大きき意味をもって働いていることは、六月十二月の晦日の抜いが神道に於いて非常に大きな意味をもつ行

事であること、農耕生活と強く関係をもつ民俗神道の祈りも行事もその年の問題に集中している事などにも観察される。その年の豊作が、現在の幸福が祈られているのである。神道では、この一年の周期を基準として、特定の時期、日が、特に宗教的なものとして捉えられる傾向は強い。この特定の日時 of 宗教的強調はキリスト教の全生涯的緊張の傾向とは相対して

いる。

表9

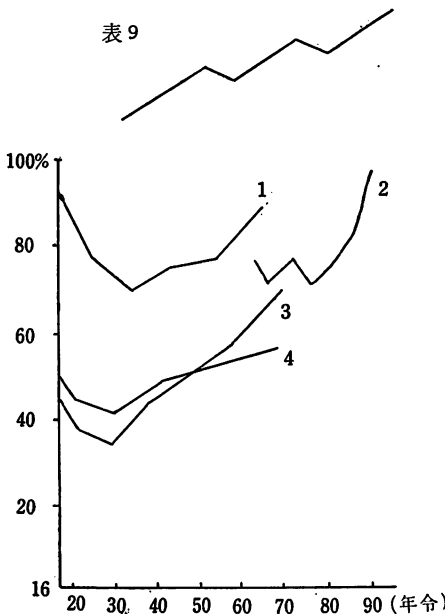


表8

1. Attendance at weekly Mass (Fichter)
2. Certain of an after-life (Cavan)
3. Daily prayer (Gover)
4. Believe in after-life

次に人生に於ける死の方向への接近にもとづく問題と死の捉え方に言及する。年をとるにつれ、その生涯は残り少なくな

表 10

開田村男子年齢別木曾御嶽信仰の姿

年齢	部落名	児 童 期	青 年 期	三 十 代	現 在
65	柳 明	○有難いという程度	○有難い	○有難い	○有難い ○年とともに深まって行く
64	大 明	○土地の慣習 ○行ってみたい、拝むべきもの	○	○勝利祈願のため登る	○神仏と同じ
61	西 沢	○子供の時から	○宗教心から登った	○有難いという気持は一貫している。	○30代と同じ
61	髭 沢	×宗教意識など全くない	△神は一般に信仰しなくてとは思っていた	△信仰がないわけでは無いがとり立てていうに及ばない	△30代と同じ
58	髭 沢	○自分も行ってみたい ○と思っていた	○自然と宗教的になり ○深まって行く	○前に同じ	○前に同じ
58	小野原	○神がいると思う	○不思議な霊山だと思 う	○	○有難い霊山
55	大 屋	○神がいるので恐ろしい ○神が持	○恐ろしい気持	○同じ	○同じ
54	西 柳	○尊い山と思う	点は子供の頃から変わりない。(特別の宗教意識をいだいた年代はない)	○同じ	○同じ
53	大 明	○有難い	○同じ	○	○
53	馬 橋	×なし	○神様だと思 う	○同じ	△最近少しうすれた
48	大 屋	×なし	○25歳位から自然と信 仰の気持が生まれて 来る	○	○有難いという気持は年 と共に増す
47	西 野	×無関心	×	×	○おろそかな気持で神に 対してはならない
46	杷之沢	×なし	○信仰あり	○同じ	△それ程登ろうとも思わ ない
45	髭 沢	○尊い	○	○	○

キリスト教、神道に於ける、事物杷

(知覚意味づけの様式)の特徴に関する研究

年令	部落名	児童期	青年期	三十代	現在
44	杷之沢	○お祭りに行くことは好きだった	○児童期より程度が高まった	○先達になったやや宗教的な気分がわいて来たが、御利益については考えたことがない	○新しい人を導いている △同じ
44	柳	×好奇心はあったが、宗教意識なし	×		
44	小野原	○尊かった	○ "	○ "	○ "
44	大屋	○皆が熱中していたので有難いと思っていた	○ "	○ "	○幾分変わる、有難いが幾分にぶる ○今でも青年期と大して変わらない
41	髭沢	×	○有難い	○ "	×
41	西	○一心に拝まねばならない	×信仰なくなる	×	×
40	柳	○	○家内安全の御利益	を御嶽山に信じていた。変化はない	
38	大屋	○信仰あり	○ "	○ "	○
38	西野	○有難い	○信仰したい	△有難い、現在昔程信仰強くない	
37	小野原	○尊敬の気持	○ "	×尊敬の意識なし	
36	杷之沢	○十二、三歳の頃山に對して宗教的な気持は豊かであった		×現在は観光的な開発をしたい △なく講の集まりに出るだけ	
35	小野	×何も感じなかった	○一生懸命信仰した	×普通の山という感じ	
34	大明	○神様を拜む気持	○ "	○神の有難さを感じる二十五歳の頃から山×への信仰的態度がなくなった	
34	西	×無関心	○願をかけた		
30	柳	×宗教意識なし	○有難いという気持		

23	25		
髭	西	×なし	×なし
沢		×なし	×なし

り、その人間の時間的展望は異ってくる。M. Argyle^(註1)は Religious Behaviour に於いて、現在米英での数多の調

査結果を用いて、年令による信仰変化の姿を取り出している。青年期が宗教的決断の時期であり、壮年期が最も宗教的に弱く、三十才より年令の高まるにつれて宗教的なものが強まっている姿を取りだしている。日本のキリスト教の場合、米英の場合と同じくこれを統計的に処理することは困難であるが、牧師群の場合には、私のテスト結果よりすると表9の如き姿を示しつつ漸次信仰が深まり、その信仰内容にも年令的变化のあることが若干観察され得る。

神道の信仰は集団を単位とする宗教として、家庭での村落での生活の中に、集団の強制力を通して、新しく生れて来た集団員に自らに与えられて行く形を強くとしている。したがって年令による信仰強度の異りは余り示さない傾向が強い。年令によって区分した山への信仰の姿は表10の如き姿を示している。三十代二十代の急激な信仰の減少は、終戦を境として、神道的なもの、在来の農村文化の急速な衰退がみられるので、年令による異りとはいいい得ない。年令による信仰変化を示している Data も若干はあるが、表10の全体としての在り方、及び神道が現世中心的傾向を強くもっている点、集団中心の宗教である点などよりしても、生涯に於ける時間線上の移行にもとづく変化はキリスト教より遙かに弱いことが取りだされる。

かくて、壮年以後年令の増加につれてキリスト教的把握特徴は強まる傾向をもつに對して、神道的把握特徴に年令

による變化は余りみられないということが觀察されうる。

次に死の捉え方についてみて行く。個人の生涯の終着点である死という時が、宗教者では比較的重視されている。TAT反応でも、牧師群神職群は一般群より同一場面を死の場面として捉えるものが遙かに多い。殊に死をTAT Storyの中心問題点にもってくる態度は牧師群で非常に強い。写真Ⅱへの反応を例としみても、これを死の場面としたもの一般群21%に対し、牧師群74%、神職群58%である。内容的にも群としての異りを示している。

「……妻が死んだ。悲しいが今更かえられぬことだ……」「……妻が死なんとしている。無限の悲しみにくずおれる」（一般群の写真Ⅱへの反応の事例）

「……若者の死せる姿に老人が隣れみを感じている。人生老若の差なく死すべき必然の運命を考えている。人生のはかなさ暗さを考える。驚きと悲しみに満ちている。若者への憐みを考えている。自らに及ぶ運命を考えている。死は人生の必然。然るに人は死に面するまでそれを真剣に考えない……」「……死を示しているようです。これは人の最も恐れかつ忌む敵である。人の死を恐るるは死をもって存在の終りなりと信ずるためである……」（写真Ⅱへの牧師群の反応事例の一部）

「まさに冥土へ赴かんとしている人に最後の引導を説いている宗教家……」「老牧師から祈りをうけている。彼女は死に直面しながらも永遠の生への欲びに浸っている。……彼の心中に悲愴な感懷が往來している……」（写真Ⅱへの神職群の反応の事例）

一般群の反応は敘述も短く内容も単純であり死を問題として取り上げているものはない。これに対し牧師群では死の場面として捉えると同時に、その殆んどが、死を中心問題としてえがいている。死が知覚を規制する factor として働く力はより強いことがうかがわれる。

神職群の場合は、量において58%と少いのみでなく、死を問題として取り上げているものは殆んどない。先にあげ

た後のものが唯一のものである。しかし、ここでは写真の關係もあるが、老牧師の行為として描かれている。このやうな事実の中にも、神道者の死への思想の少いことが考えられる。

神道の歴史の中で死は中心問題として捉えられていない。そこには、死を忌むという姿が強く示されている。きたなきこと（罪穢）の中でも死はその最たるものの一つである。神職が死者を避けるは勿論であるが、（戦後は異なる）お山かけも身内に死者がある年は出来ない。又死に對する思考も殆んど展開されていない。

「さて世の人は……、みな悉く死すれば、必ずかの予美国に行かざることを得ず。いと悲しきことにて侍る。……さて死すれば妻子眷属朋友家財万事をふりすて、馴れたるこの世を永く別れ去りてふたび還り来ることあたわず。かならずかの穢き予美国に往くことなれば、世の中に死ぬほど悲しきことはなきものなるに、……すべて喜ぶべきことをも、さのみ喜ばず、哀しむべきことをも、……物に動ぜぬをよきことにして尚ぶは、みな異国風の虚偽にして……人の心直かりし時には、死して後になりゆくべき理窟などをとやかくやと工夫するやうの、無益のこざかしき料簡はなくして、ただ死ぬれば、予美国に行くことと、道理のままに心得て、泣き悲しむよりはかはなかりぞかし……」（宣長）

このような立場は復古神道のみではない。多くの神道の流れで死は余り問題とされてはいない。しかし、TAT結果では、先にも言及した如く、死は、神職群において一般人よりは意識の中心部に位置し、知覚規制の場面でより強く働くようであった。

三、自己の捉え方

自己をどのようなものとして捉えるかは、場面の捉え方に強い影響を与えて行く。自己を、時間の流れの中で継続

的に存するものとして捉えないというような形をとると、その perception に大きな変容を来すことが考えられる。キリスト教においても、

「我が為すのではない。キリストが我に在りて為し給うのである。我は死んだのである。キリストが我に在りて生きかつ働き給うのである。このことは信仰ではない……、事実である」「自己は死して神我に在りて生くるに及んで我はまことの勇者となる。我の修養鍛錬が足りないのではない。我の中にまだ自己が絶えないのである」（内村鑑三）

この内村鑑三にみられるような自己の捉え方が、personality に実現される場合、その perception に大きな変容が生ずることは勿論である。

W. James などの self を、social, material, spiritual, pure に分析して考察し、Freud の流れは機能的な立場から ego Id super-ego の考え方をとっている。G. Murphy はこの self への態度を人格構造の中心的核、多角椎的構造の頂点として捉えている。そして、各自の perception はその全人格の在り方を通して、その全人格を投影した形において、構成されるものと捉えているので、その核点、頂点となる self の捉え方が perception を決定する度合は非常に大きいと考えられる。しかし、ここでは紙数の関係で self に関する理論的考察を省略し、ただ一つのことを述べておく。人格は遺伝と環境との函数であるので、遺伝的因子を考察しなければならないが、各自の持っている自己像は捉えられたものであり、成長過程において漸次的に構成されたものであるということ、このことを確認しておくことは非常に重要である。

先づキリスト教における自己の捉え方の特徴的な点に言及する。

表 11

	一 般 (全)	教 員	会 社 員	神 道	日 蓮 宗	禪 宗	カ ト リ ッ ク	プ ロ テ ス タ ン ト	
私は人間のため に生きています	31.11 %	22.22 %	18.75 %	22.22 %	73.33 %	33.33 %	58.82 %	59.25 %	
私は平生は、 たまたまの 夜道を歩いた たつた一人の や海の真中に な時たじま く感じます	17.77 %	11.11 %	31.25 %	33.33 %	0 %	27.77 %	23.62 %	7.40 %	
私はどんな時 でも余りも たはなない ことはあり ません	51.11 %	66.66 %	50.00 %	44.44 %	26.66 %	38.88 %	17.64 %	33.33 %	

キリスト教、神道に於ける、事物把 (知覚意味づけの様式)

R. Otto は Das Heilige において、キリスト者の神に対してある自己の捉え方を、塵であり、無でありあくたであるとの感じ、被造物感として取りだしている。日本のキリスト者でも、自己の小ささの意識は強い。自己を罪あるもの、無価値なるものとする意識は先の写真Ⅵへの反応でも観察された。このような神の前での自己の無価値の感はキリスト教的信仰の中核的な点である。しかしこの無価値の感は、無限の価値としての神を、その全き他者性においてではあるが、自己の位置にむかえ入れることを、また小さな自己の殻のとけ落ちることを含んでいる。この変化が事物把握に与える影響は大きい。これに伴って事物への価値づけは変化し、性度附与の姿なども大きく異ってくる。

このような神の前での無価値の感は、対人関係の場面での小ささを意味しない。勿論謙譲はキリスト教的な大きな徳目であり、従属性も表7にもみられる如く

表12

	一 般	プロ テス タント	カ トリ ック	禪 宗	日 蓮 宗	神 道	会 社 員	教 員
沢山の人の前に出たりする時、自分をとてもたよりなく感ずる	28.57 %	13.20 %	18.75 %	11.11 %	26.66 %	15.78 %	20.00 %	22.22 %
そのような時でもそうたよりなくは感じません	51.02 %	49.05 %	56.25 %	55.55 %	46.66 %	36.84 %	55.55 %	55.55 %
私はそのような時でも少しもたよりなさを感じません	20.40 %	37.74 %	25.00 %	33.33 %	26.66 %	47.36 %	25.00 %	22.22 %

O.C.T. 自己信頼性—自己非信頼性平均値比較表
尺度 (+ 3 — - 3)

牧 師 群	神 職 群	禪 僧 群	日 蓮 僧 群	神 父 群
+0.82	+0.52	-0.02	-0.02	+0.30

キリスト教、神道に於ける、事物把 (知覚意味づけの様式) の特徴に関する研究

二二八

一般人よりは強い。しかし、この群は対人関係の場面で表12の如く強い自己信頼性を示している。人格の尊厳と平等の意識は明治期日本のキリスト者の諸運動の原動力でもあった。

「尊い人間たる位からいえば成私達も同等である。誰一人私の頭の右に上ることは出来ん」(金森通倫)

「キリスト教は一個の値打ちというものが非常に貴いものであることを主張した。その神を除いて天上天下唯我独尊というぐらいの値打ちのあるものであることを目覚めせしめた」(海老名弾正)

両方の捉え方が同じ人格の中に共存している。この両者の共存と前者がより核的地位を占めているという姿が、事物把握、行動の姿に特殊の色合いを与えて行く。

更に、この自己の捉え方に関しての神基両者の他の大きな異りは、キリスト者が個としての

自己を捉える傾向の強いのに對し、神道者が社会構造の中に組み入れられたままの形で自己を捉える傾向の強い点である。前者では、行為の責任の主体は個としての自己であり、父子の場合でも、父と神、子と神の関係の方が優位に立つべきであるとの考え方を含んでいる。後者では社会構造の枠組のままで自己が問題となっており、キリスト教にみられたような個としての個への分析は少ない。神道者の意識の中で家族、同族、村、国などの持つ位置は大きい。free Association でも家族、国などの出る度合は他群に比して遙かに大きい。なお、神職群にのみ、家族、友との連帯を想い出すことを通しての inner adjustment が観察された。

「隣人や父母兄妹の暖かい追憶にふけると、神がはじめて彼の上に恵みを垂れるであろう」「頭を上げればよい。そして友を思い出すとよい」(写真Ⅰへの神職群の反応の事例)

社会的枠組を、その結合関係を想起することを通して、行づまりからの立ちなおりが得られるのである。

その生長の過程においても、神道的文化の中では血縁的地縁的なものの強調は強い。そして、これらは Significant others (Hans Gerth and Wright Mills の^{註14)}いう)としての位置を持ち、彼等によって社会的枠組の中で捉えられた当事者の像が、当時者の自己像の構成に強く働いている。このような局面でも社会的枠組のままで自己像の構成がなされて行く。これに對し、キリスト者の場合には、この significant others が神にのみしぼられ、その他の人々が第二義的な意味をもつ方向への動きが観察される。

なお、写真Ⅴへの反応の分析結果において、この二人の人物の捉え方に際し、キリスト者牧師群の反応が、より強く社会的枠組をはずして、これらの人物を捉えていることも面白い結果である。



写真 V

更に、神道の行事の多くが集団的行為である点は、先に観察した山信仰の場合でもみられる。登拝する個人は集団の代表として決定され、集団の幸を祈るべくお山をかける。その際の意識、祈りの内容、又その間の家族、部落の行動様式にもその姿がみられる。

以上に観察して来た諸局面での在り方は、相互に関係をもちつつ、この人々の事物把握を強く規制している。これらの在り方の群としての類似性は、事物把握に、群としての特定の型の存在していることを示している。そして、このような事物把握に基いて異った行動様式が展開しているのである。

最後に、ここでは省略した価値づけの問題、神の捉え方の問題、更には社会構造、経済状態、言語構造と関連した諸問題なども非常に重要な因子として働いていることを断っておかねばならない。更に日本のキリスト者を欧米のそれと対比する時、殆んど点で、それが神道者の方向へのかたよりを持っていることが取り出されている。このことは文化変容に関する諸研究の結果を考え合せる時当然の事でもある。

この小論を通して、キリスト教的文化の伝統の上に立つものと、神道的文化の伝統の上に立つものの事物把握（知

覚意味づけの様式)に異りの存すること、又それぞれは特殊の型を持っていることが考えられうる。ここで取り出された諸特徴は次の研究の作業仮説となる。

註 (1) 場面把握という言葉の使用について——私がこの言葉を使用しているのは知覚という言葉が、比較的狭い意味の実験心理学的用法において使用され理解されることが多く、私の意味づけといっているものが比較的人らない形で使用されることのためである。ここで、問題になるのは社会的文化的な要素が G. Murphy などのいう広い意味での perception をどのように規制して行くかということである。一つの宗教圏内、文化圏内の人々の広い意味での知覚様式に存する型 pattern を取り出そうとするのである。

- (2) J. S. Bruner and R. Tagiuri, perception of people, in *handbook of social psychology* 1954 pp 634—654, C. Kluckhohn, *Culture and Behaviour*, in *handbook of social psychology* pp 921—968, R. Redfield, *The primitive world* 1953 pp 84—100 などにも見られる。
- (3) E. Troeltsch, *die Sociallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*.
- (4) Yinger, *Religion, society and Individual* 1957
- (5) Thematic Apperception Test は一連の絵への反応の全体としての姿を通して分析をなして行くが、ここでは敘述の便宜上一つの写真への事例で説明して行く。私は九枚の写真を使用した。研究目的により interpretation に種々の様式のあつたことを附言する。

なお、T A T は普通人格の在り方を捉えるのに使用される。perception は全人格を投影した形において行なわれる故にこの perception の在り方を通して人格を捉えて行くこととするのである。ここでは、その T A T 資料を perception の在り方を明らかにさせる資料として使用した。

- (6) 岸本英夫、東西哲学者会議一九五九年の paper

キリスト教、神道に於ける、事物把握(知覚意味づけの様式)の特徴に関する研究

- (7) 山形県内高校 7、中学 10、小学 10 に依頼して山に関する作文を蒐集 (Ansatz Method)
- (8) Yinger 岸本博士をはじめ、この点を強調するものは多い。
- (9) J. Wach, *Sociology of Religion* pp 34—53
- (10) 野村「宗教」心理学講座
- (11) M. Argyle, *Religious Behaviour* 1958 pp 58—70
- (12) G. Murphy, *Personality* 1947 pp 479—522 pp 619—662
- (13) 野村、日米文化交渉史、宗教教育篇 一六九—二二三
- (14) Hans Gerth and C. Wright Mills. *Character and Social Structure* 1954 pp 80—111
- (15) 山信仰に関する敘述は少し冗長であると思つたが、自然をめぐる問題は神道には非常に重要な要素であり、またこのような捉え方が社会的行動の型、慣習とからみ合っている姿が重要な問題であるので、具体的な姿を少し詳細に示した。なお、本研究は岸本博士を班長とする総合研究の一部を構成する。
- (16) 種々の日記類を Data として使用したが、ここでは Wesley 及び内村を引用した。
- (17) ここでとりあげられているキリスト教は日本という異文化圏の中に入って緊張した形式におけるものである。

関係文献

- | | |
|-------------------------|---|
| Allport, G. W. | The ego in contemporary psychology. Psychol. Rev. 1943, 50, pp 451—478 |
| Bergler E. and Róheim G | Psychology of time perception. Psychoanalysis Quart. 1946 15, pp 190—206 |
| Bertocci P. A. | The psychological self, the ego and personality. Psychol. Rev. 1945, 52, pp 91—99 |
| Bartlett F. C. | Psychological method and anthropological problems. Africa 1937, 10, pp 401—419 |
| Cattell R. B. | Personality 1950 |

- | | |
|----------------------------------|---|
| Chen I. | The awareness of self and the structure of ego. <i>Psychol. Rev.</i> 1944, 51, pp 304—314 |
| Eisenstadt S. | The perception of time and space in a situation of culture-contact. <i>Journal of Royal Anthropology</i> 1949, 79, pp 63—68 |
| Evans-pritchard | The Nuer 1940 |
| Fensterheim H and Tresslt, M. E. | The influence of value systems on the perception of people. <i>Journal of Abnormal and Social psychology</i> 1953, 48, pp 93—98 |
| Hall C. S. and Lindzey G. | Theory of personality 1957. |
| Hallowell A. I. | Temporal orientation in western civilization and in a preliterate society. <i>Amer. Anthropol.</i> 1937, 36, pp 647—670 |
| " | Some psychological aspects of measurement among the Saulteaux. <i>Amer. Anthropol.</i> 1942, 44, pp 62—77 |
| " | Ojibwa Metaphysics of being and the perception of persons, in person perception and interpersonal Behaviour. 1958 |
| Hilgard E. R. | Human motives and the concepts of the self. <i>Amer. psychologist</i> 1949, 4, pp 372—382 |
| Kellogg W.N. and Eagleson B. M. | The growth of social perception in different racial groups. <i>J. Educ. Psychol.</i> 1931, 22, pp 367—375 |
| Lee Dorothy | Notes on the conception of self among the Wintu. <i>J. abnorm. soc. psychol.</i> 1950, 45, pp 538—543 |
| Lundholm H. | Reflections upon the nature of the psychological self. <i>psychol. Rev.</i> 1940, 47, |

pp 110—127

Nadel S. F.

A field experiment in racial psychology. *Brit J. psychol* 1987, 28, pp 195—211

"

Experiments on culture psychology. *Africa* 1987, 10, pp 421—485

Sarbin T. R.

A preface to a psychological analysis of the self. *Psychol. Rev.* 1952, 59, pp 11—22

Sherif M.

The psychology of social norms 1986.

Sherif M and Cantril H.

The psychology of ego involvements. 1947.

Smith Martain

Different cultural concepts of past, present and future, A study of ego-extension.

Psychiatry 1952, 15, pp 395—400

Sorokin and Merton

Social time, A methodological and functional analysis. *Amer. J. sociology* 1937,

42, pp 615—629

Thompson L.

Perception patterns in three Indian tribes. *psychiatry* 1951, 44, 235—263

Thouless R. H.

A racial difference in perception *J. Soci. Psychol.* 1938, 4, 330—339